

令和7年度 全国公共図書館研究集会 (児童・青少年部門) 報告書

目次

(資料1) 令和7年度全国公共図書館研究集会(児童・青少年部門) 開催要項・チラシ	1
(資料2) 実施報告	5
(資料3) アンケート集計結果	17

令和7年度全国公共図書館研究集会(児童・青少年部門)開催要項

1. 研究主題
(テーマ) 「子どもの心に読書の楽しさを広げる図書館づくり」
2. 趣旨
人々の価値観やライフスタイルが多様化するとともに、社会全体のデジタル化が加速度的に進む中、一方で、本の世界に触れるきっかけを持たずに育つ子どもたちもいます。このような状況であるからこそ、人々が生涯にわたって本に親しみ、豊かな人生を築いていくことの大切さを改めて社会全体で共有し、子どもたちの読書活動をより充実させていくことが重要です。乳幼児期から児童期、そして青少年期のそれぞれの段階において、すべての子どもたちが読書の楽しさを味わい成長していくことのできる環境づくりが、いまこそ必要なのです。
そこで、今回の研究集会においては、地域における読書活動の拠点である図書館が、読書の楽しさを子どもたちの心に広げ、人々が将来にわたって読書に親しむ社会の実現に向けてできることを一緒に考えていきましょう。
3. 主催
公益社団法人日本図書館協会
令和7年度全国公共図書館研究集会(児童・青少年部門)実行委員会
4. 主管
長崎県立長崎図書館
5. 後援
長崎県教育委員会
6. 開催形式
YouTubeによる限定配信(オンデマンド配信)
7. 配信期間
令和7年12月8日(月)～令和8年1月19日(月)
8. 対象
図書館職員、社会教育に関わる職員、
教職員(幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等)、
保育所及びこども園等の職員、保護者、子どもの読書活動支援ボランティア等

9. 内容

開会挨拶 及び 情勢報告	基調講演	事例報告①	事例報告②	事例報告③
--------------------	------	-------	-------	-------

(1) 開会挨拶及び情勢報告(20分)

① 令和7年度全国公共図書館研究集会(児童・青少年部門)実行委員会委員長
(長崎県立長崎図書館長)挨拶

② 公益社団法人日本図書館協会挨拶及び情勢報告

(2) 基調講演(1時間30分)

金原 瑞人氏(かねはら みずひと)

【プロフィール】

1954年、岡山県生まれ。

翻訳家、児童文学研究家、法政大学社会学部教授を2025年3月末に御退職。
児童書やヤングアダルト文学を中心に海外文学の翻訳や本の書評などを行う。
法政大学では英語や翻訳の授業を行い、本についての魅力を伝えてこられた。
これまでに654冊の訳書と65冊の著作を手掛けている。(2025年8月末時点)

【演題】

「子どもの本やヤングアダルトむけの本を訳してきて考えたこと」

【講演内容】

1983年に最初の訳書を出してから、約40年の間に650冊ほどの作品を訳してきました。
この間に海外文学を取り巻く状況も、日本語もずいぶん変わりました。
そんな話をざっくばらんにお話ししようと思います。

(3) 事例報告(各30分)

①伊万里市民図書館(佐賀県) 児童・YAサービス担当者 副島 陽子氏

【演題】

「伊万里市民図書館YAサービスについて」

【事例内容】

30周年を迎えた伊万里市民図書館。子どもたちに寄り添ってYAサービスに取り組んで
きています。伊万里市民図書館として、また、現在の担当として大切にしているサービス
を紹介します。現在のYAの子どもたちがおかれている環境の中で、子どもたちの成長を支
えるためにできることを考え、いかに本につなげていくのか、思いを伝えたいと思います。

②長崎市立図書館(長崎県) 児童・YAサービス担当者 尾下 昭子氏

【演題】

「ヤングアダルトサービスと図書館 ―YA世代の居場所を考える―」

【事例内容】

YAボランティア、YA向け広報紙、交流ノート、SNS発信、職場体験、ライブラリーフェス
ティバル、学校連携等、長崎市立図書館ヤングアダルトサービスの具体的な取り組みを
紹介します。

③長崎県教育庁生涯学習課 県民学習班 指導主事 新谷 かほる氏

【演題】

「長崎県の子ども読書活動推進計画について」

【事例内容】

令和6年3月に策定した「第五次長崎県子ども読書活動推進計画」の事業内容を中心
とした事例報告。

申込フォーム



10. 参加申込 (1) 参加費：無料
(2) 定員：なし
(3) 申込期間：~~令和7年9月16日(火)～令和7年11月21日(金)~~
※申込期間を **令和8年1月13日(火)** まで延長しました。
(4) 申込方法：「研究集会参加申込フォーム」からお申し込みください。
(https://apply.e-tumo.jp/pref-nagasaki-u/offer/offerList_detail?tempSeq=10130)

11. その他 申込者には、申込時にご登録いただいたメールアドレスあて、動画閲覧用URL及び資料ダウンロード用URLをお送りいたします。メールアドレスの記載に誤りのないようお願いいたします。

12. 問合せ先 令和7年度全国公共図書館研究集会(児童・青少年部門)実行委員会事務局
〒856-0831 長崎県大村市東本町481
TEL：0957-48-7700 FAX：0957-48-7704
MAIL：miraion-tosyokan@miraionlibrary.jp

『子どもの心に読書の楽しさを 広げる図書館づくり』

開催形式

YouTubeによるオンデマンド配信

開催期間

令和7年12月8日(月)～令和8年1月19日(月)

申込期間

令和7年9月16日(火)～令和7年11月21日(金)

参加無料



お申し込みはこちらから

全国の図書館、教育関係者、子どもの読書活動に関わる
全ての方等どなたでもご参加いただけます。

内容

↓ 開会挨拶及び情勢報告

- ①令和7年度全国公共図書館研究集会（児童・青少年部門）実行委員会委員長（長崎県立長崎図書館長）挨拶
- ②公益社団法人日本図書館協会挨拶及び情勢報告

↓ 基調講演

「子どもの本やヤングアダルトむけの本を訳してきて考えたこと」

金原 瑞人氏（翻訳家、児童文学研究家）



↓ 事例報告

- ①「伊万里市民図書館 YA サービスについて」／副島 陽子 氏（伊万里市民図書館 児童・YA サービス担当）
- ②「ヤングアダルトサービスと図書館 -YA 世代の居場所を考える-」
／尾下 昭子 氏（長崎市立図書館 児童・YA サービス担当者）
- ③「長崎県の子ども読書活動推進計画について」／新谷 かほる 氏（長崎県教育庁生涯学習課 県民学習班 指導主事）

研究集会HPはこちら
<https://miraionlibrary.jp/>

子どもの読書活動に関わる全ての皆様のご参加を心よりお待ちしております。



お問い合わせ

令和7年度全国公共図書館研究集会（児童・青少年部門）実行委員会事務局
〒856-0831 長崎県大村市東本町 481 TEL: 0957-48-7700 Fax:0957-48-7704
Mail: miraion-tosyokan@miraionlibrary.jp

主催：公益社団法人日本図書館協会、令和7年度全国公共図書館研究集会（児童・青少年部門）実行委員会
主管：長崎県立長崎図書館

令和7年度全国公共図書館研究集会(児童・青少年部門) 実施報告

1. 申込者数・視聴回数について

●申込者数：881名(県内:159名、県外:722名)

〈内訳〉

(単位:人)

職 種	県 内	県 外	合 計
図書館職員	111	651	762
教職員(幼稚園、小学校、中学校、 高等学校、特別支援学校等)	29	17	46
保育所及びこども園等の職員	0	2	2
保護者	3	3	6
子どもの読書活動支援ボランティア	4	12	16
その他	12	37	49
合 計	159	722	881

●視聴回数：3,464回

〈内訳〉

(単位:回)

内 容	回 数
開会挨拶(実行委員長) 開会挨拶及び情勢報告(日本図書館協会)	678
基調講演 「子どもの本やヤングアダルトむけの本を訳してきて考えたこと」	957
事例報告① 「伊万里市民図書館YAサービスについて」	663
事例報告② 「ヤングアダルトサービスと図書館—YA世代の居場所を考える—」	611
事例報告③ 「長崎県の子ども読書活動推進計画について」	555
合 計	3,464

2. 申込期間について

当初の申込期間は令和7年9月16日(火)から令和7年11月21日(金)までとしていたが、より多くみなさまにご視聴いただけるように、申込期限を令和8年1月13日(火)まで延長した。

3. 動画・資料について

動画・資料については、事前に申込者にのみ動画視聴用及び資料ダウンロード用URLを通知し、申込者への限定配信を行った。動画配信期間中に申込があった参加者については、自動返信による申込完了通知の中に、動画視聴用及び資料ダウンロード用URLを記載することで通知した。

4. 内容について(要旨)

〈開会挨拶及び情勢報告〉

○実行委員長(長崎県立長崎図書館長)加藤 盛彦 開会挨拶

【要旨】

・子どもを取り巻く環境の変化と課題

国のGIGAスクール構想をはじめ、子どもたちを取り巻く世界のデジタル化が急速に進行している中、「子どもの読書」をどのように守り育てていくのが重要な社会的テーマとなっている。また家庭の蔵書数が少ない子どもの学力や心の成長が懸念されている。

・本研究集会のテーマ設定の背景

デジタル化が進む今だからこそ、「子どもたちの心に読書の楽しさを広げていく取組を進めていきたい」という思いでテーマを設定。

・過去の取組とのつながり

昭和40年代の新聞記事では、「テレビの世界から子どもたちを取り戻そう」という活動が行われていた。現代においては「デジタルの世界から本の世界へ子どもたちを取り戻す」ために、本研究集会を契機として、共に取組を進めていきたい。

・図書館が目指す未来

より多くの子どもや多様な課題を抱える子どもたちが、図書館で本と出会い未来を描き、図書館での思い出が故郷のあたたかな思い出として、子どもたちの心に住み続けるような取組を進めていきたい。

○公益社団法人日本図書館協会 植松 貞夫 開会挨拶及び情勢報告

【要旨（開会挨拶）】

・本研究集会の意義

児童・青少年サービスに携わる全国の図書館職員や関係者が各地域での先進事例や新たな取組、また課題や悩みについても共有することで、これからの図書館サービスの可能性を追求する場として開催されている。

・子どもを取り巻く変化と図書館の役割

デジタル化や社会の多様化により、児童・生徒、青少年の興味や価値観、情報取得行動が大きく変化している。

図書館は単なる読書施設ではなく、子どもたちが物語や知識の世界を自由に旅し、自ら学びを深め、社会参加に備えて自分自身を育てていく場であり、仲間づくりの拠点として重要な役割を担っている。

・不読率の課題

第69回学校読書調査(2024)によると、1カ月の間に1冊も本を読まないと回答した児童・生徒の比率は、小学生8.5%、中学生23.4%、高校生48.3%と不読率が高く、20年間大きな変化はない。

伊万里市民図書館、長崎市立図書館、長崎県の取組を共有することで、解決のヒントや読書推進に向けた新たな視点や発見を得てほしい。

【要旨（情勢報告）】

・図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議（2024年10月設置）

人口減少やデジタル化、グローバル化等の進展等により、図書館・学校図書館のより一層積極的な役割発揮が求められている。本有識者会議では、デジタル社会への対応、読書バリアフリー法への対応、子どもの読書環境充実、司書人材の育成・処遇改善などが主要テーマとして議論された。

大学教員・図書館員・学校司書など計23名で構成され、日本図書館協会からも2名が参加している。

・書店の減少と「書店活性化プラン」

書店数は2000年代初めから半減し、自治体の約28%に書店が存在しない状況。

書店を地域の文化拠点として位置づけ、2025年6月に省庁横断型「書店活性化プラン」が公表された。書店と図書館との連携強化、地域書店からの図書購入状況調査なども盛り込まれている。

・**読書バリアフリー**

「視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する基本的な計画」第2次5か年計画が2025年度より開始。

弱視者向けのアクセシブル電子書籍の普及を大きな柱とし、フォント、背景色、行間調整、音声読み上げ対応などの読書環境整備を推進するとともに、これにかかる人材育成や製作経費の節減、司書の利活用技術向上のための研修などを実施する。

・**電子図書館・電子書籍と子供の読書活動推進に関する実態調査（2024年4月公表）**

令和2年、4年、6年と進むにつれ、公立学校・公立図書館ともに電子書籍導入例が増加し、特に公立図書館の導入が急増している。6例の活用事例も紹介されている。

電子書籍活用のポイント4点を提示。

- (1) 教育現場における電子書籍サービスの導入しやすい環境
- (2) 電子書籍サービスの種類の検討
- (3) 電子書籍サービスの導入・活用の課題への対応策
- (4) 公立学校と公立図書館の連携推進

・**子ども読書活動推進計画の策定状況（2024年9月公表）**

「子どもの読書活動の推進に関する法律」第9条（2001年施行）に基づき、都道府県・市町村が計画策定に努めることとされている。国の第5次「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」においては、令和9年度までに市100%・町村80%の策定率を目標としており、令和6年度末時点で、市98.8%、町村80.9%の策定率となっている。

「策定予定なし」の理由として「人材不足」などが挙げられる。

・**日本図書館協会の最近の動き**

学校司書のフルタイム配置を実現していくための提言を2024年9月18日付で発出。

ホームページを2024年7月にリニューアルし、情報を見やすく整理した。

〈基調講演〉 翻訳家・児童文学研究家 金原 瑞人氏

「子ども向けの本やヤングアダルトむけの本を訳してきて考えたこと」

【要旨】

・はじめに：翻訳家としての歩み

約40年にわたり翻訳を続け、訳書は650冊を超える。法政大学教授を退職し、現在は翻訳家・児童文学研究家として活動している。翻訳のことや40年間翻訳をやってきて、気づいたこと、考えたことを中心にお話する。

・翻訳の本質と難しさ

日本語は一人称・二人称・終助詞の種類が極めて豊富で、英語の一人称「I」のように日本語に対応する語が多数存在する場合、日本語に訳すと「私」「僕」「俺」などのように「色」がついてしまう。「吾輩は猫である」が“I'm a cat.”になるように、全く違う言語を完全に翻訳するのは困難であるが、作品の本質や笑う、泣くなどの感情は翻訳でも十分伝えることができる。それを信じているからこそ翻訳を続けることができているし、そのような楽観的な考え方も翻訳家には必要である。作品の感情を伝えるために翻訳家は悩み、工夫しながら作品を作り上げている。

・日本語の変化について

1980年代に「い抜き・ら抜き言葉」が若者文化として普及し、現在では一般化している。また「やる → あげる」への言葉の変化(例:「子どもに小遣いをやる」→「小遣いをあげる」)や若い編集者が表現の暴力性や読者の不快感に敏感になってきていることなど、丁寧さ・優しさを重視する言葉遣いへ社会が変化してきている。言葉というものは、若い人、次の世代が作り、変えていくものであり、翻訳の現場でもそれを実感している。

・ヤングアダルト (YA) 文学の歴史と日本での定着

それまでの世界は子どもと大人という2層構造で成り立っていたが、アメリカで1950年代の戦後の経済成長に伴い“若者”という層が成立した。中高生・大学生が一つのマーケットとなり、音楽・映画・ファッションで若者文化が確立していく。

1960年代になると、黒人の公民権運動やウーマンリブ運動などにより社会的なひずみが生まれ、ドラッグの蔓延や離婚率の上昇などの影響を受け、中高生の非行やドラッグの問題等が発生する。そのような中で、悩んでいる中高生が読むもの、つまり児童書と一般書の隙間を埋める存在として、リアルを描き、中高生を主人公とするようなヤングアダルトというジャンルが必要とされ、作家や出版社の間で若者向けの本を出そうとする気運が高まっていく。

また、この頃の図書館の調査で、大人になっても読書する人の多くが中高生の頃に読書習慣を形成し、本の面白さを経験しているという調査結果を受け、アメリカ全土でYAコーナーが整備されていく。

この図書館の動きと出版界におけるヤングアダルトというジャンルの誕生が1970年代のアメリカでヤングアダルト小説が書かれ、読まれるようになる要因となる。

日本では当初、受け皿がなかったが、1980年代後半の金原氏と赤木かん子氏による朝日新聞の書評コーナー『ヤングアダルト招待席』の取組やリアリズムを描くヤングアダルト作家、空想や異世界を描くファンタジー作家の台頭、さらに図書館の尽力でYAコーナーが普及し、1990年代に日本においてもヤングアダルトというジャンルが定着した。

また1990年代終わりに『ハリー・ポッター』が発表されたことで、翻訳もののファンタジーが次々に出版され、その影響を受けて日本のファンタジー作家も生まれていった。

・翻訳の面白さと異文化体験

生きたままの鶏を買う中国人と生きたままの魚を買う日本人、羊の目玉を食べるアラブの文化と魚の目玉を珍重して食べる日本の文化など、異文化でも根源的な喜びや価値観は共通していることに気づいた。翻訳というのはこのようなものだという気がする。

馴染みのないところで、馴染みのない人間が、馴染みのない話をしたり恋愛したりしている本を読むうちに、ふとその中に入り込んでしまって、同じように感動する、翻訳の面白さはそこにあると思う。

固有名詞の難しさや文化的背景の違いのハードルはあるが、ぜひ気力・体力の充実しているうちに翻訳作品を読んでほしい。

・AI 翻訳と翻訳家の未来

現在、翻訳家のほぼ全員がAIを活用しており、訳文の漏れや誤解のチェック、原書の内容把握、編集者の原稿選定などすでに実務で広く使われている。AIは文法に律儀で、処理が早く、翻訳者が見落とす点を補ってくれることもある。ぜひみなさんもAIで遊んでみてほしい。

一方で、翻訳がAIに完全代替されるかについては意見が分かれている。ヨーロッパ言語の間では、かなりいい翻訳ができるようになってきているが、ヨーロッパの言語と漢字文化ではまだそれほどうまくいっていない。しかし、そのうち翻訳ソフトにおける言語の壁が低くなることを期待している。

これからの翻訳者は英語力と同時に、AIをいかに活用し、さらに磨きをかけ自分のものにするかというところにシフトしていく気がしている。

これからAIがどのような形で我々の生活に入ってくるかわからないが、私は私らしく面白い作品を一つずつこつこつと翻訳を続けていく。

〈事例報告①〉伊万里市民図書館 児童・YAサービス担当者 副島 陽子氏

「伊万里市民図書館YAサービスについて」

【要旨】

・伊万里市民図書館について

伊万里市民図書館は平成7年7月7日に「伊万里市立図書館」から名称を変更し、新たなスタートを切ってから開館30周年。「伊万里をつくり 市民とともにぞだつ 市民の図書館」という目標を掲げ、ボランティアの方々と共に市民に寄り添ったサービスを提供している。

・YAコーナーについて

蔵書数42万点のうち、YAコーナーの蔵書数は約8,500点で、全体の約2%の蔵書を占める。YAコーナーは開館当初から設置され、現在は二人体制で運営。

学習席(40席)、グループ学習室、教科書センターなどを併設し、中高生の学びを支援している。YAコーナーの配置場所が、一般開架室の旅雑誌・ガイドブックの先にあり、世代を超えて親しまれる場所となっている。

・YAコーナー配架・選書の方針

YA世代の思考力や感受性を育むことができるかどうかを基準とし、一時的な流行に偏らず、5～10年後にも読み継がれる本、価値観や視野を広げてくれる本の選書を行う。名作文学、多様な視点を持つ本、社会的課題を扱う本などをバランスよく配置することで、他者理解や自己の内面への気づきを得る機会を提供している。書架スペースの制約を踏まえつつ、他コーナーとの調整を行いながら丁寧な選書と棚づくりを心掛けている。

・YAサービスの内容

●館内でのYAサービス

毎月、中学生向けに「おすすめの本」を紹介する案内を作成し、館内掲示やホームページへの掲載、市内中学校・義務教育学校に送付している。

「進路応援コーナー」では職業・進学・面接・小論文など、受験や就職活動に役立つ資料、各学校の情報資料を充実させている。

「メッセージボード」はYA世代とYAコーナー担当者とのやり取りの場となっており、利用者が書いたメッセージやイラストに担当者が1枚1枚コメントをつけて再掲示する形で長年続けており、幅広い世代から愛されている。

季節の展示・企画展示を数多く実施し、YAコーナー入口付近には勉強の合間に読める本、反対に出口へ向かう進路には、帰り際に手に取ってもらえるように時間をかけて読む本を置くなど工夫を凝らしている。

中学生制作のPOP展示は同世代の生徒たちが共感や親しみを持って楽しめる展示となっている。

●館外でのYAサービス(アウトリーチサービス)

自動車図書館「ぶっくん1号・2号」が市内幼稚園・保育園、小中学校、義務教育学校など全79ステーションを巡回し、市内中学生においては、全体の約4割に読書機会を提供している。高校への巡回は行っていないため、高校進学後の接点の薄れを懸念し、今後の課題としている。

●学校図書館との連携

2025年度から「学校図書館連携室」が市教育委員会に設置され、公共図書館と学校図書館が情報共有し支援していけるような体制づくりを強化している。

「図書室の先生」向け研修、本の展示会への参加促進などを実施し、学校図書館がより活性化できるような読書活動の支援を行っていく。

・YA世代との向き合い方・今後の展望

YA担当として「子どもたちに声をかけること」を大切に、挨拶や声かけなどがしやすい雰囲気づくりを心がけている。交流を図ることで、中高生からも相談等がしやすくなり、よりよい案内や貸出につながる。そのような子たちがいずれYAコーナーを卒業し、生涯を通して当館の利用者になってほしいと願っている。

18歳で成人し、責任を伴う立場に置かれる中で、図書館を目の前の課題を解決し、生きる力を獲得する糧として活かしてもらいたい。そして自分の意志で図書館に向かってほしいと思う。YA世代にはスマホ中心の情報摂取に偏らず、図書館において、意図しない「寄り道」から予期せぬ知識や道しるべを見つける楽しさがあることを伝えていきたい。そして、今後も一人ひとりとの出会いを大切にしながら、図書館が世代を超えて親しまれる場であり続けられるよう努めていきたい。

〈事例報告②〉長崎県立図書館 児童・YAサービス担当者 尾下 昭子氏

「ヤングアダルトサービスと図書館-YA世代の居場所を考える-」

【要旨】

・長崎県立図書館について

長崎県立図書館は2008年にPFI方式で開館し、蔵書数約89万点、年間貸出点数約110万点。2021年には電子図書館サービスを開始し、2023年には指定管理者制度を導入した。長崎駅、県庁などから徒歩圏内に位置する。

・YAサービスとは、YA世代の特徴

YAサービスは12～18歳の青少年利用者を対象に、公立図書館が提供するサービスである。IFLAガイドラインでは、情報資源へのアクセスと発達課題に対応した支援により、子どもから大人への移行を支援することが使命とされている。

YA世代は「子ども」と「大人」の間に位置し、進路・自立・対人関係など多様な悩みや課題を抱える時期である。

・長崎県立図書館のYAサービス

開館当初から展開し、現在、こどもとしゃかん担当7名のうち2名が兼任する。

1階YAコーナーは、フロアの一番奥に位置することで大人の目を気にせず、センシティブなテーマの本も安心して手に取ることができ、必要な情報へのアクセスの機会が広がることを期待している。さらに9機の自動貸出機によりプライバシーにも配慮するなど、「見守りつつも干渉しない」適度な距離感を保つことでYA世代の読書の自由を守っている。

・主なサービス内容

●展示・情報発信・交流

展示は、1～2か月ごとに世の中の動きやイベント、スポーツ、芸術、LGBTQなど多様なテーマで行っている。

「投稿のコーナー」では、お題を決めて投稿用紙を準備し、思いを書いてもらい掲示している。「YA掲示板」では、10代のための図書館だより「WAKABA」、YAフリーノート、本のPOP、はじめの一文などYA世代が気軽に立ち寄り、参加・交流できる工夫をしている。2階のスタディルームへ行く経路には「YA出張フリーボード」を設置し、YAコーナーの掲示板と同じ情報を掲示することで図書館からのお知らせの周知に役立っている。

●イベント

編集者を招いたトークイベントや調べる学習たいけん教室など、YA世代が将来の職業について考え、学びの場として活用できるイベントを実施している。

●学校連携

長崎市中学校図書館教育研究会での選書の講師や学校、施設、幼稚園等への資料の譲渡会、長崎県高等学校総合文化祭(ライブラリーフェスティバル)地区大会の開催、中高生・大学生の職場体験・インターンシップの受入れ、私立中学校の「読書科」授業で図書館活用体験を行うなど図書館と学校が相互に協力し、学校連携を積極的に行っている。

●YAボランティア

図書館ではYAボランティアを毎年20名程度募集し、イベント補助などの活動に参加。募集対象を12～18歳とすることで、社会との接点が弱い大学生や通信制高校生の参加も広がっている。

●その他

長崎新聞社発行の「ととってmotto!」でおすすめ本紹介、SNS(Instagram・X・LINE)で情報発信を行いYA世代へ届けている。

・まとめ・今後の展望

図書館はYA世代にとって、学校や家庭を補完する「第3の場」として機能している。YAサービスを通じ、安心して過ごし、学びや交流を深められる環境を整備するとともに、今後は、さらにYA世代の声を反映したサービスづくりやSNS発信の工夫などを行っていきたい。図書館の役割としてYA世代が地域社会の一員となり、成長につながる一助になればと思っている。

〈事例報告③〉長崎県教育庁生涯学習課 県民学習班 指導主事 新谷 かほる氏

「長崎県の子ども読書活動推進計画について」

【要旨】

・第五次長崎県子ども読書活動推進計画について

長崎県は、国の方針に基づき「第五次長崎県子ども読書活動推進計画」（令和6年度～令和10年度）を令和6年3月に策定し、基本テーマを「読みたい本がいつも子どものそばにある」としている。

計画では子どもが「手に取ってみたい」「開いてみたい」「読んでみたい」と思える本が、いつも子どものそばにある環境づくりを家庭、地域、学校等の社会全体でつくりあげたいという思いを込めて、以下の3点を重点課題として設定した。

(1) 人々のつながりを生かした読書活動の推進

県は、職種を問わず子どもの読書活動に関心や関わりのある方等のネットワーク構築のための交流会を開催し、子どもの発達段階に応じた読書活動の推進を行う。

(2) 子どもの主体的な読書活動の推進

読書の楽しさを自ら感じ、進んで本と関わる子どもを育てるため、子ども読書リーダー養成講座、ビブリオバトル、読み聞かせ体験などの事業を実施している。

(3) 多様な子どもの可能性を引き出す読書環境の整備

障害のある子ども、日本語指導が必要な子、読書が苦手な子、不登校児童生徒など、すべての子どもに読書の機会が保障されるよう「読書バリアフリー推進計画」を令和5年1月に策定。読書バリアフリー体験会等を開催している。

・子どもの読書状況の現状（長崎県）

令和6年度に長崎県が行った「読書の現状に関する調査」によると、11月1か月間の読書冊数は小学生18.4冊、中学生10.3冊、高校生3.4冊と、20年前から大幅に増加しており、全国平均よりも高い傾向にある。

読書のきっかけは、「興味・関心の高まり」が最も多く、「友達のすすめ」「家族の関わり」が次に続く結果となった。

電子書籍利用は学年が上がるほど増加している一方、調べ学習の場としての学校図書館の利用は一人一台端末の配備により減少傾向にある。

・子どもの読書活動推進のための方策

県の取組

(1) 市町における「子ども読書活動推進計画」の策定と計画に基づく取組の推進

(2) 「学校図書館ガイドライン」の活用、学校図書館の計画的な整備、新聞の複数紙配備、学校司書の適切な配置、教育委員会における支援等の実施

(3)「長崎県バリアフリー推進計画」に基づく、読書環境の整備と読書支援サービス活用の推進

家庭における子ども読書活動の推進では、「出かけよう!図書館へ」を合言葉に、家庭、学校等・図書館、県や市町が連携協力して、家庭での読書を生活の中に位置づけられるよう働きかけている。

地域における子ども読書活動の推進では、「つながろう!広げよう!読書の輪」を合言葉に、図書館、学校、福祉部局、民間団体などの連携により、全ての子どもの主体的な読書活動の推進及び家庭における読書活動を支援する取組を横断的に行うことができるよう取組例を掲載している。

学校等における子ども読書活動の推進では、「引き出そう!読みたい知りたい伝えたい」を合言葉に、発達段階に応じた読書指導を示し、教職員研修や「ながさき まなびネット」による学習機会提供を進めている。

・実際の取組例

(1) 子ども読書リーダー養成講座

小学4年生から中学3年生までを対象に、司書の仕事や楽しい読書活動を体験的に行う講座を通して、子どもたち自身が読書の楽しさを味わい、大切さを知ること、それぞれの学校や地域で読書の楽しさや素晴らしさを広めていこうとする「読書リーダー」を養成することを目的に実施している。

2025年度は県内2つの市町で実施し、その地域の図書館だからこそできる活動を盛り込みながら活動を行った。

(2) ネットワークづくり交流会

乳幼児期からの読書活動の推進を図るために、福祉・医療関係者、園や学校関係者、民間団体等、様々な方が交流することで、ネットワークが構築され、子どもの読書活動の幅が広がることを目的に実施している。

2025年度は県内2つの市町で実施した。助産師や教員、読み聞かせボランティア、主婦といった幅広い職種の方が参加し、ブックスタートの活動をしている方や出産後、子どもにどう関わってよいかわからない保護者に読み聞かせを進めている助産師の実践発表、児童文学研究家の講演、意見交流会を行った。

(3) 読書バリアフリー体験会

多様な子どもの可能性を引き出す読書環境の整備に向けて、点字・音声・LLブックなどの読書支援するための機器や本の紹介を行い、理解促進を図っている。

より多くの方に読書バリアフリーのことを知ってもらうことで、本当に支援を必要としている方につなげることができると考え、参加対象は絞っていない。

・まとめ

長崎県は読書推進に関する取組を通して、「子どもの読みたい本が、いつも子どものそばにあ

(資料2)

る」環境づくりを進めている。「つながろう!広げよう!読書の輪」を合言葉に、これからも人と人のつながりを生かしながら読書の輪をひろげていく。

5. アンケートについて

令和7年12月8日(月)から令和8年1月30日(金)まで、研究集会参加者を対象にアンケートを行った。アンケートは、研究集会ホームページや申込完了通知メール、各動画終了後の画面、YouTubeの概要欄にアンケートフォームを記載することで収集した。

アンケート集計結果

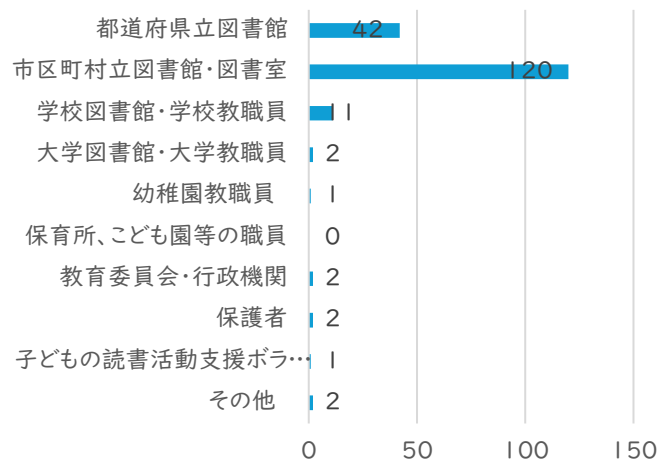
回答人数：183人

〈質問内容〉

1. ご所属を教えてください
2. 研究集会への評価
3. 公開期間
4. 研究集会をどこでお知りになりましたか
5. 研究集会の開催時期・開催方法について、ご意見・ご感想をお書きください
6. 研究集会ウェブサイトについてご意見・ご感想をお書きください
7. 基調講演「子どもの本やヤングアダルト向けの本を訳してきて考えたこと」をご覧になってのご感想等をお書きください
8. 事例報告①「伊万里市民図書館YAサービスについて」をご覧になってのご感想等をお書きください
9. 事例報告②「ヤングアダルトサービスと図書館-YA世代の居場所を考える-」をご覧になってのご感想等をお書きください
10. 事例報告③「長崎県の子ども読書活動推進計画について」をご覧になってのご感想等をお書きください
11. その他 お気づきの点がございましたらお書きください

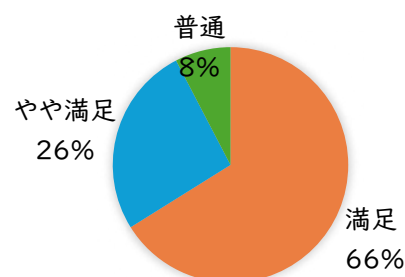
1. ご所属を教えてください

都道府県立図書館	42
市区町村立図書館・図書室	120
学校図書館・学校教職員	11
大学図書館・大学教職員	2
幼稚園教職員	1
保育所、こども園等の職員	0
教育委員会・行政機関	2
保護者	2
子どもの読書活動支援ボランティア等	1
その他	2



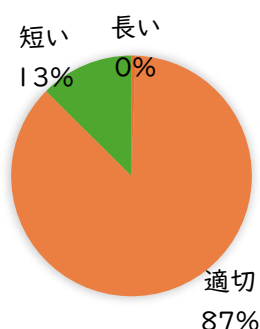
2. 研究集会への評価

満足	121
やや満足	48
普通	14
やや不満	0
不満	0



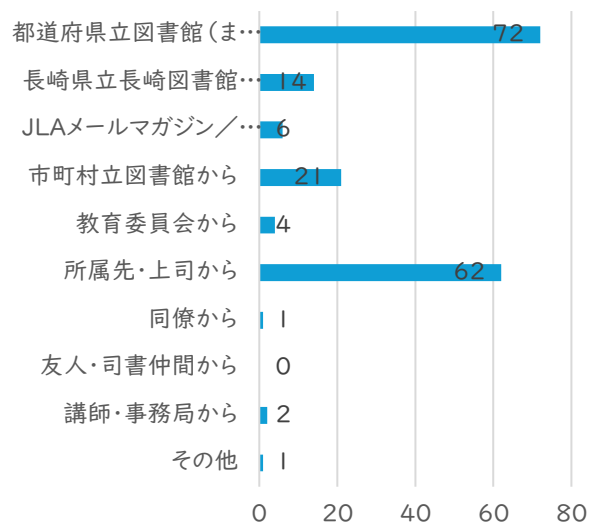
3. 公開期間

長い	1
適切	159
短い	23



4. 研究集会をどこでお知りになりましたか

都道府県立図書館(または地域の図書館協会等)からの情報提供	72
長崎県立長崎図書館(ミライon図書館)ホームページ/SNS等	14
JLAメールマガジン/ホームページ	6
市町村立図書館から	21
教育委員会から	4
所属先・上司から	62
同僚から	1
友人・司書仲間から	0
講師・事務局から	2
その他	1



5. 研究集会の開催時期・開催方法について、ご意見・ご感想をお書きください（一部抜粋）

開催場所までなかなか行けないときの、オンライン配信は大変ありがたい。オンライン配信により、全職員で拝聴しながらの職員研修を行うことができた。
いつでも視聴できるというオンラインの良さもあるが、実際に交流をしたり、図書館を見学したりできる現地開催の良さもあると思う。
動画配信のため遠方でも参加することができ、また、十分な配信期間があったため、突発的な業務が入っても余裕を持って視聴することができた。さらに、聞き逃しやもう一度確認したい部分を戻したり、一時停止をしてメモを取ったり、オンデマンド形式ならではの利点により、より理解を深めることができた。
対面研修に勝るものはないと感じてはいますが、オンデマンドで受講できることにより、距離や開催日時を気にせず参加できて嬉しいです。
1ヶ月間オンデマンド配信があるということで、とても助かりました。現地参加や当日配信のみでは、気になる講演があっても諦めることがありますので、今後も同じ形式を続けていただけると嬉しいです。
場所や時間を選ばずに参加でき、項目を分けていただいているので、時間がある時にわけて動画を見ることができて良かったです。私の場合、YouTube視聴の時に広告が度々入ってしまったので、もしできるのであれば次回から広告が途中ではいらないようにしてもらえると助かります。
途中で広告が入ってくるのが気になりましたが、途中で離席しても再度好きなタイミングで見直せるのがやはり、理解も深まり見やすかったです。
オンデマンド配信だと勤務の状況を見ながら、受講ができるので助かりました。また、おおまかな時間も掲載していただき、二日間に分けて調整することができました。開催時期もちょうど、一息つけるタイミングなので、良かったです。
全国大会だと日数、交通費などハードルが高く、参加したくてもできないことが多かったのですが、このようなウェブ開催だと自分の時間に合わせていいものを見ることができ、勉強できる機会が増えるので、とてもよかったと思います。
空き時間に動画視聴することで、業務への影響を最低限にすることができることは、研修の方法としては大変ありがたく感じる。一方で、その場での質疑応答を聞く機会がないことや開催地の図書館の見学などはできないため、仕方がないこととはいえ、その分印象が薄くなることは否めない。
集会のまとめを兼ねた全体討議のようなものがあるとよかった。
今回、年末年始を含む期間に視聴できたので、自分のペースでじっくり講義を聞くことができ大変良かったです。
直接長崎県方面に伺うのは難しいので、動画視聴で開催していただき有難いと思いました。
質問したいことがある場合に備えて対応を検討いただけるとよいと思います。

6. 研究集会ウェブサイトについてご意見・ご感想をお書きください（一部抜粋）

動画視聴、滞りなくできました。情報も整理され、見やすいです。
項目ごとにわかれていたのも、一気に見る時間を確保しなくても、隙間時間に合わせて少しずつ見ていくことができました。
興味のある内容について、自宅で情報が得られることは大変有意義だと思います。
直感的にわかりやすいサイトとなっていた。YouTube のリンクや資料への導線が整理されており、迷わず視聴を開始できた。
直通のURLをいただけたのは時間短縮や別デスクのメールが見れないパソコンでも見ることであったので大変ありがたかった。サイトも見やすく探しやすい。
特別なアプリケーションのダウンロードなどなく視聴できるのがよかったです。
ミライon図書館のホームページで、動画や資料へのリンクがあったら便利だと思いました。
すぐにアクセスできましたし、分かりやすかった(見やすかった)です。

7. 基調講演「子どもの本やヤングアダルトむけの本を訳してきて考えたこと」をご覧になってのご感想等をお書きください（一部抜粋）

長年、YAサービスに携わってきた講師ならではの、YA文学の歴史や若年層の言葉についてなどの話で、よく理解ができた。
一人称の訳し方のお話や、AIを上手に活用しているお話など、興味深く聞かせてもらった。ヤングアダルトの本の日本での発展の仕方や、「死体」と訳すことへの考え方など、なるほどと思うことも多く、楽しい講演だった。
異なる文化の中でもその本質で同じ部分があるということをご自身の体験からお話されていたことが大変興味深かった。
いつもあたり前に使っている日本語のすばらしさ、そして時代とともに移り変わってきた日本語の変遷の状況等を改めて知ることができて、大変面白く聞かせていただきました。お話の中にあつた「中高校生のときに本を読む習慣がついて、その面白さを知った人ほど、成人でも本を読んでいる」という言葉が大変印象的でした。今回の先生のお話や事例報告等をふまえ、当館でもその年代における読書への興味や図書館とのつながりを密にする取り組みを頑張りたいと思ったところです。
自分も中学生の頃からよく読んでいた本の翻訳家である金原さんの講演を聞くことができて良かったです。日本語も日々変化しているという話と、YAの歴史がどう変化して今に至るのかという話が興味深く、おもしろかった。翻訳家の金原さんが「体力・気力が充実しているうちに翻訳ものを読むべし」と話されたのがなるほどと思われ、YAの方や多くの人に伝えたいと思った。
内容が日頃気になっていたことを解説してもらったような感覚で大変興味深いお話でした。
講師の翻訳への誠実な向き合い方がよくわかりました。世代の変化に敏感であること、ヤングアダルトサービスにも同じことが言えると思います。どうしても自分たちの時代をもとに考えがちなので、視点を広げていきたいと思いました。

翻訳も読みやすくなっていること、YA世代だからこそ感じるものがあるということを忘れず、また金原さんが仰っていた文化の違いを超えたところに喜びがあるという感覚を持ちながら、本を選んだり、自分も読書を楽しみたいと思いました。

実際にヤングアダルト向けの本づくりに携わっている方のお話を聞いたのはとても良かったです。時代を通して言葉の使い方の移り変わりや人々の意識の変化を汲み取って、翻訳したり本を作ったりするのは、とても繊細な、とても素晴らしい仕事だと思いました。

普段は気づかないで使っている日本語の表現や、日本語の美しさ、表現の豊かさを知ることができました。

翻訳は読みづらいものだと言われると、読みづらいものと思って良かったんだなどちょっと安心した。

翻訳家のかたのお話を聞ける機会は非常に貴重で、特に翻訳することの例えをお話されているのを聞き、そのお考えに触れることができるとても有意義な時間を過ごせました。

金原さんのお話 特にYAの歴史の流れを知り、現在の児童、YA文学の状況に引き付けて聞いていました。AIとの付き合い方も、翻訳の世界にとどまらず、司書の仕事にも応用できることでした。AIをうまく利用するのは人で、そのためには 自分をみがき、成長し続けることがたいせつですね。体力気力が落ちてきている60代ですが、翻訳文学を読み続けたいと思います。

ヤングアダルトにも触れながら、AIの活用についても話題が出ており、YAサービスを考えるヒントとなった。

私が勤務する図書館にも、YA コーナーがあります。ですが年に1回入替する程度で、あまり変化がなく同じような本のセレクトでした。私は担当ではありませんが、YAコーナーの歴史や重要な理由が分かったので、担当のスタッフとコーナーを新しくしたいです。

なぜヤングアダルトというジャンルが発生したのか、歴史背景を詳しく知ることができてよかった。また外国文学を読むことに抵抗を感じていたが、どうしてなのか少し理解できた。先生のお話がとても面白かった。

金原先生のヤングアダルト本の歴史について知ることが出来て良かったです。また翻訳家として、外国語と日本語の壁や時代による言語の変化などについて考えている先生の実感ある話に引き込まれ、とても面白かったです。

翻訳者の翻訳に対するあたたかみが伝わってくる講演でした。

翻訳については全く知らない世界だったので、大変面白い講演でした。AIに仕事を奪われるという考えではなく、AIを使いこなしながら仕事を続けていくという発想に、金原先生の柔軟性を感じました。

金原瑞人氏の人柄にふれることができたことが大変うれしいです。異文化や違う社会の体験を本を通して感じる楽しさを人間味あふれる語り口で説明していただきありがとうございました。外国文学は敬遠する傾向にありましたが、知らぬ間に異世界に入り込む体験をしたいと感じました。

YAサービスの歴史がおもしろかったです。普段何気なく行っている図書館サービスにも深い意味と歴史があることを知り、今後もっと力を入れて取り組まなければならないと考えることができました。

全ては翻訳できないかもしれないが、翻訳によって登場人物の感動やその国の文化が実感を持って伝わる。伝わる日本語が時代によって変わってきていて、それに合わせて翻訳している。AIが様々な翻訳に役立っていることなど、興味深かった。また、翻訳文学は若いとき、その世界を好奇心を持って受け取ることのできる時期にたくさん読んでおくとよいという言葉に共感した。子どもたちに翻訳文学もすすめていきたい。

翻訳者が翻訳するうえで心がけていることや、裏話など興味深く聞かせていただきました。時代とともに変わる言葉の使い方にも配慮していることは知りませんでした。翻訳者は翻訳するだけでなく、著者や読者への気配りが必要であると感じました。このほか、YA本の変遷からAI翻訳についてなど現在も活躍する金原さんだからこそ語れる話題も多く、翻訳の世界を一步踏み込んで知ることができたと感じます。

金原先生の翻訳家として言葉の壁を超えて物語を届けるという情熱に触れ、また、YAが誕生した時代背景を学び、改めて本には世界を広げる力があると感じた。金原先生の「言葉は常に変化し、それは次の世代(若者)が作っていくもの」という言葉が特に印象に残っており、図書館の現場においても、変化していく言葉や新しい感性で書かれた作品を柔軟に受け入れ、今のYA世代が求めているリアルを届けることも大切な視点なのではないかと感じた。

数多くの翻訳の経験から、とても貴重なお話が聞けて良かったです。日本語の変化で普段から違和感を持っていた言葉など、改めて納得することもあり、興味深かったです。AIのお話も現状が聞けてとても参考になりました。学生に授業をされていたご経験からか、お話がとても分かりやすかったです。子どもの頃から翻訳小説を読むことで海外の世界や考え方に触れることを楽しんできました。今までも面白い作品ばかり翻訳されてこれ、読むのを楽しみにしてきましたが、これからもコツコツと翻訳されるとお伺いし、また楽しみが増えました。

英語と日本語ではニュアンス部分まで伝えることは難しいという部分、Iを事例として取り上げてくださり、大変勉強になった。そういう部分の伝え方は、翻訳者の腕の見せ所であり、読者が本を選ぶ際の基準になりえると感じた。また、日本語の変化についても、私は若輩で変化後の言葉に慣れているため、逆に金原さんの「やる」という言葉に違和感があった。翻訳家の皆さんはそこも敏感に感じ取り、一般とYAとで翻訳を変えていると聞き、私たち図書館の催しや展示もそういった配慮を取り入れる必要があると思った。YAというジャンルができた経緯も初めて知った。このような流れを知った上での選書は、知る前の選書と大きく変わってくると感じたため、私が図書館で働くなかで「なぜこのジャンルができたのか」「なぜこの歴史書ができたのか」などの経緯も勉強していきたい。子どもと大人の狭間で苦しむ若者たちに気づき、それらのジャンルを開拓した人の世間への観察眼は図書館司書も養うことができれば、展示やイベントでYA世代を引き込んで聞けるのではないかと思った。

翻訳の世界について、また、英語や日本語、その他の言語について深く知る機会がありませんでしたので、大変興味深く、勉強になりました。子どもの頃は外国文学を読むことが多かったのですが、最近読む頻度が減っていました。そんな中で、外国文学を読む楽しみを教えていただき、気力、体力が充実しているうちにたくさんの作品に触れ、YA世代への読書のきっかけづくりにもつながられればと思いました。

8. 事例報告①「伊万里市民図書館YAサービスについて」をご覧になってのご感想等をお書きください（一部抜粋）

YAコーナーが広く、またYA世代に寄り添った場を作ることに尽力していることがうかがえて大変参考になりました。

「YA世代との向き合い方」で大切にしてきたこととして、「子どもたちに声をかけること」というお話がありました。交流を通してよりよい図書館の使い方を考えてもらうという、決して一方的でない双方向のつながりの大切さについて考えさせられました。

多くのYAサービスを提供されていて、素晴らしいなと思った。サービスが充実されていて、このような図書館が身近にある方は図書館を身近に感じられて愛着が湧くのではないかと思った。自分たちの図書館ではどんなことができるだろうかと考えるきっかけになった。今は欲しい情報だけを追う日常かもしれないが、図書館では意図せぬところから情報に出会う楽しさを発信していくというお話が印象的だった。

図書館は意図しない寄り道から予期せぬ知識や道しるべを見つけられる楽しさがある、という言葉がとても印象に残りました。

YA世代と良い距離感で関わってらっしゃることが、素晴らしいなと感じました。当館では自習には来るけれど、書架にある本に手を伸ばしている子は少ないです。仰っていたように寄り道から知識を得る楽しさを見つけてほしいなと常々考えています。自習以外の接点を考えてみたいと思いました。

他館の事例を聞くのはとても楽しいです。とくに、学習室の使い方のお話で、学習室を使う学生はとても気を遣いながら使っていて、あとから来た子どもその雰囲気を読み取って使っていると聞いて、その場所の雰囲気を利用者も作っているのだなと感じました。子どもたちに対して、とても細やかに丁寧にコーナーや展示物、棚づくりをされていて、とても参考になりました。

館内の配置から棚の構成、選書にまで、細部に渡って考え抜かれているのだと感じました。メッセージボードを使った利用者と担当者のやりとりは、とても良いアイデアだと思います。すべてを真似して取り入れることができませんが「できること」の選択肢が広がりました。担当者の熱い思いを聴き、このような司書が働いている図書館を利用できる市民は幸せだと思いました。とても共感しました。

今人気だけの本ではなく長く読まれる本を選書するという方針は、同じくYAの書棚を担当する私には心の支えになる言葉でした。中高生からのメッセージに、司書がコメントを返すという試み、大変だとは思いますが、興味を持ちました。

特に勉強になったのは、YA世代との向き合いかただった。メッセージボードの取り組みや声かけの話から利用者とのつながりを感じ、出来ることから取り組もうと思った。

学習席の位置を起点にして本の展示を展開されているとお話があり素晴らしいことだなと感じました。展示の種類も豊富さもあることから、学習席付近はすぐ読めるもの、出口付近は長めの本を展示し貸出へつなげる工夫をされているとのこと、やはり展示場所や手にとってもらう工夫が必要だなと改めて考えさせられました。メッセージボードでの交流も当館でも何か交流の場を設けることができればと思います。また、高校へ移動図書館が巡回していないことで高校生への図書館利用の減少を懸念されており、高校生への発信はやはり課題が残るなと印象を受けました。

最後におっしゃっていた、図書館では子どもたちに声をかけるようにしているというお話が印象深かったです。ご講演にあった掲示の工夫やイベントだけでなく、そのような日々の心がけが子どもたちとの関係を作り、将来に繋がっているのだらうと考えさせられました。YAサービスは子ども時代だけでなく、その人が大人になってからもつながるようなサービスであると改めて学ばされました。ご講演ありがとうございました。

伊万里市図書館は本当に素晴らしい空間で、この地域に住んでいる人が羨ましいと思っています。市が中枢となる課を設けた点はどの自治体へもぜひお願いしたいと思いました。

YAコーナーに学習席の設置、メッセージボードの活用など、YA世代が利用しやすい環境づくりに大変努力されていることがよくわかりました。学習席を利用されている利用者の「人の気配のする空間が好き」という言葉に、図書館内の素晴らしい空間を想像することができました。今後の図書館業務に役立てていきたいと思います。

人づくり、まちづくりを支える成長する図書館として市民に寄り添う図書館活動をされていることはとても参考になりました。身近に感じてもらえる図書館づくりに取り組みたいです。メッセージボードは実践してみたいと思います。

毎月のおすすめ本の情報発信や中学校と連携してPOPコーナーが常設化したなどが素晴らしいと感じた。また、副島さんが大事にしている「こどもたちに声をかけること」が図書館に親しみをもってもらうためにとてもよいと感じた。

メッセージボードを通じたYA世代と職員のやり取りが印象的だった。小学生から30代という幅広い層が、イラストなどを通じて自由に自己表現を行い、それに対して職員が一つ一つ丁寧にコメントを返している姿に、図書館が単なる「本を借りる場所」ではなく、大切な「交流の場」として機能していて、大変参考になった。

最後の「YA世代との向き合い方」で語られていたことに、司書としてとても共感しました。

YAコーナーの空間作りや動線に配慮した展示、選書基準など様々な興味深い工夫があり参考になることが多くありました。メッセージボードは、1つ1つにコメントを付けて再掲するなど担当者の方は大変な努力をされていると思いましたが、長年続けておられることでしっかりと利用者を掴んでいると感じました。利用者に声かけをするなどYA世代は、コミュニケーションを取ることが直接利用につながる重要なポイントとであると改めて思いました。学校図書館で働いていた経験から、子どもの読書支援の大切さを身をもって理解されていて、それが伊万里市の公共図書館から学校図書館への支援の拡充にも協力にもつながっていると感じました。講師の、利用者ひとりひとりの人生に寄り添う図書館でありたいという願いも強く伝わってきました。

アウトリーチサービスとして自動車図書館を学校施設などの昼休みに巡回していると聞き、児童・YAサービスが充実していると感じた。地方都市出身者からすると、市内の図書館が気軽に行けない（交通機関があまりなく自動車が主流）子どもは、保護者が図書館を利用しない限り図書館への接点がないことを実感している。自身での行動距離に制限のある子ども時代に、図書館が身近に感じられる自動車図書館が来てくれるのは、今後の読書習慣により影響を与えている取り組みだと思った。

学習室の配置に合わせて展示の内容を変えているところが感心しました。

メッセージボードの活用が印象的でした。かつてYA世代だった30代くらいの方までが利用していると仰っており、図書館員の方が1つ1つメッセージを記入するといった丁寧な対応が、図書館の継続的な利用につながっているのだと感じました。また、声かけを意識されていて、少しずつ本の相談ができるような信頼関係を築くことができたことと仰っており、一人一人に寄り添ったサービスも印象的でした。

学習室に「教科書コーナー」があるのは、非常に面白いと思いました。色々な試みをされていて、一度見学に伺いたいです。

講師の方がとても情熱的に取り組んでいらっしゃるのが印象的でした！

9. 事例報告②「ヤングアダルトサービスと図書館－YA世代の居場所を考える－」をご覧になってのご感想等をお書きください（一部抜粋）

資料の展示だけでなく、YA世代の来館者どうしが交流できるような企画を立ててコーナーづくりをしているところが素晴らしいと思いました。

ヤングアダルト世代だからこそ、大人の目を気にせず本を選べるような環境づくりの大切さを改めて確認させていただくことができました。安心できる居場所としての図書館のあり方を、当館でも考えていきたいと思います。またさまざまなイベント・特集の取組や学校との連携のあり方なども大変参考になりました。

見守りつつも干渉しないようなコーナー作りをされていて、YA世代に寄り添ったサービスがされると感じた。干渉されないようでありながら、投稿コーナーや掲示板で交流ができたりと、干渉されないけど居場所になるようなところが良いなと思った。

ヤングアダルト世代は、自分の選ぶ本を他人に知られたくないという部分に着目し、書架の配置を考えておられる点に、感心しました。

写真やスケッチに積極的に参加していることに驚きました。家でも学校でもない図書館は、YA世代の子にとって調度良い(ゆるく過ごせる)場所なのかもしれないと思いました。当館では、自習や職業体験以外でYA世代との接点はありません。大人になった時、「図書館は居心地が良かったな」と感じてもらえる場所にしたいなと改めて思いました。

具体的な取り組みをたくさん紹介していただき有益でした。どの取り組みも利用者の参加も多く、満足度が高いと感じました。当館に当てはめて、できそうなところを真似したいと思いました。多くのスタッフにも見せたいと思いました。

大人の目を気にせずに本を選ぶためにカウンターから一番離れている場所にYAコーナーを設置していると聞き、YA世代に対しての信頼が大きいのだと感じました。YA世代の安心できる居場所として図書館を位置づけていることはとても素晴らしいと思います。また、中学生の読書の傾向を考察するなど、理想的な学校との連携の方法だと感じました。

YA世代の目線にたったコーナー作りや展示など取り組みたい事例がたくさんありました。はじめの一文など楽しいアディアがあるとそれだけで行きたい場所になると思います。そんな場所づくりを実践していきたいです。

YA世代に「自由に安心して利用してもらおう環境を整える」という観点はあまり意識したことがなかったため、考えさせられるきっかけになりました。

YAの書架は、学習に訪れたときに目に触れやすい通り道、というイメージを持っていましたが、あえてスタッフや大人の目に触れない一番奥ということで、そういう配慮の仕方もあるのかと発見がありました。対象年齢の子たちが通りやすい館外通路に、「出張フリーボード」を設置されているのが、図書館に興味関心を持ってもらうきっかけ作りによいなと思いました。

ヤングアダルト世代や学校図書館と数多くの交流の場を設けておられると感じました。ヤングアダルト向けのイベントやライブラリーフェスティバルといった県規模の大きな交流の場があったり、YAボランティア募集も図書館へ興味を持ってもらう機会の一助になっていると感じました。また雑誌や本の譲渡会を学校や施設等ともされていたり、選書班として学校図書館との連携にも力を入れておられると大変勉強になりました。またヤングアダルトコーナーでの交流として【投稿】がとても面白い取組だなと思い、当館でもこういった交流ができる場を設けることができないかと考えさせられました。

YA世代にとって居心地の良い空間はどのように作られるだろうかということを考えさせられました。特に、書架が外から見えないようにすることで、YA世代の心の安全性を確保し、様々な資料を手に取りやすい空間にしているという工夫が印象的でした。フロア全体の見通しがよいことで、図書館側としては見守りがしやすいという利点があると思うのですが、それとは逆の見えづらい環境をあえて作るという所に、利用者目線の大切さを感じました。

該当世代が利用者の中心となる掲示板があり、テーマが本だけではない点は、まだ入り込めていない子どもの読書の入り口にいい取り組みだと思いました。選書の研究会があることがとても即効性を期待できる会だと、私も参加させてほしいと思いました。

写真で大喜利といった、本から少し離れた企画によって、YA世代に図書館に足を運んでもらうやり方は、ぜひ参考にさせていただきたいと思いました。

学校図書館との連携がしっかりとられていて、素晴らしいなと思いました。選書についてのアドバイスをされているということで、学校図書館が頼ることのできる、市立図書館という立場が確立されているんだなと思いました。

「はじめの一文」、投稿コーナー、YAボランティアなど、さまざまな取り組みが参考になりました。はじめの一文では、電子書籍と連動させるしくみが素晴らしいと思いました。

明るく素敵な環境で、攻めのイベントをされている様子を伝えていただき、学びの多い実践例で勉強になりました。

新館オープン時からYAを独立したカテゴリーとして重視し、先進的な取り組みをされていて参考になった。職員(大人)との距離感や配架の工夫などにより、YA世代が「ここは自分のための場所だ」と感じられるような環境作りがされていた。子どもから大人への過渡期で非常に繊細なYA世代にとって、自動貸出機が設置されていることにより大人の目を避けて借りることができるのは、心理的な安心が保障され、来館頻度や貸出冊数の向上にも繋がるのではないかと感じた。

YAと直接接点をつくるというサービスがとても充実しているので参考になります。展示や貴サイトで過去のおたよりなども拝見させていただきながら伺いました。

当館でもYA世代の居場所づくりについて大に関心があり、長崎市立図書館様の事例を聞くことができ刺激を受けました。当館にもYA世代向けの棚がありますが、くつろげるような雰囲気には遠い環境です。しかし学習室利用を通じてYA世代にアピールできることがあると気づくことができました、ありがとうございました。

本を読むということだけでなく、居場所として図書館が存在しているのは素晴らしいことだと思いました。積極的に関わることと同じくらい、見守るということも大事なんだなど改めて考えさせられました。

大人の視線が気になる時期の子どもたちへ配慮をしている書架づくりの事例を知ることができて良かった。

10. 事例報告③「長崎県の子ども読書活動推進計画について」をご覧になってのご感想等をお書きください（一部抜粋）

「子ども読書リーダー」という形で子どもたち自身が読書をほかの子どもに薦めていく形を作り出しているところが興味深かったです。

長崎県としての取り組みを知ることができ、よかった。子ども読書リーダー養成講座の取り組みが興味深かった。今度は参加した子どもたちから、他の子どもたちや、家庭での読書活動にまさにリーダーとして広めていく存在になるのだろうと想像できて、良い取り組みだと思った。

現在の読書環境の現状がわかり、自分のところと比較して、どのようにかかわればいいのか、考える一助になりました。

読書以外の楽しみが増えると共に、読書冊数が減少するのは仕方ないことと思っていました。しかし“読書するきっかけ”が、自分が子どもの頃と同じだったので、取り組み次第で子どもと本は繋がっていただけるのだと分かりました。また読書バリアフリーの体験会も、良いイベントだと感じました。当事者だけでなく、若い世代にも触れてもらうことで、更に新しいツールや読書というものの理解に繋がると思います。

長崎県の1ヶ月あたりの読書冊数の平均が高いことを見ても、県がきめ細やかな対応をしていることがうかがえます。子どもの読書リーダー養成講座やネットワークづくり交流会など、子どもや一般の方々を巻き込んでいく取組みなど学ぶ点が多くありました。

圧倒されたのは、令和6年11月の1か月あたりの読書冊数が全国平均を上回っていることです。また、バリアフリー推進計画を令和6年度末時点で約半数の市町が策定済だということにも驚きました。重点課題の具体的な取り組みとして紹介されていた「子ども読書リーダー養成講座」は、認定されて終わりではなく、参加者がそれぞれの立場でできることを考えていることはとても素晴らしいと思いました。とても子どもたちの意識が高いのだと思います。この養成講座にヒントをもらい、来年度夏休みに事業を展開したいと思います。

行政が主体的に、子どもの読書について真剣に取り組んでいることが分かりました。読書活動を支援するボランティアを結ぶ取り組みは特に継続してかかわることが重要だと思っています。行き届いた計画になっていると思いました。

長崎県の子どもの1ヶ月に読む平均冊数があんなに多いとは思っていませんでした。平均を大きく上回っているのに驚きました。いろんな方の取り組みの賜物だと思います。

当館でも司書体験は行っていますが、3日間にわたって濃密な体験をされているということで、子どもたちにとってもとても満足のいくプログラムであると感じました。大学生との連携も取られていて、子どもたちの将来の姿を見せてあげているような感じがしました。参加されている人も多く、熱心な読書好きな子がたくさんいる証拠だなと思いました。

図書館外の関連部署や、地域、家庭も包括した話で、広い視野をもって図書館サービスをしていく必要性を感じました。

たくさんの協力者が数多くの楽しいイベント計画を実施されていて凄いなと感じました。小中高生の読書傾向が上がり続けている理由に納得です。県全体の協力体制が凄いなと思いました。

多様な子どもたちの可能性を拓くために、計画的に事業を進めておられた。ネットワークを作ることの大切さに改めて気づかされた。

人とのつながりを大事にして、家庭・図書館・地域・園や学校みんなで安心する読書活動がとても素晴らしいと思いました。読書の習慣づけや体験などたくさん行われていて、子どもの読書活動の整備が整っているなど感心しました。コロナ禍からやっと学校等への読み聞かせが復活してきたので、発達段階に応じた支援や指導から始めていきたいです。司書の仕事や読書の楽しさが伝えられるように、体験やビブリオバトルの復活も考えたいと思いました。

本好きの読書リーダーを育てる講座について、特に興味深く拝聴しました。自身が図書館司書として働く際に、小中高生と直接関わる機会が少ないことを思い返し、そのような子ども向けの企画や関わりを増やすことが、図書館の利用を高めるかもしれないと考えさせられました。

家庭における読書推進活動として、「出かけよう!図書館へ」の取り組みが印象に残りました。図書館に行かない人が増えているので、小さい頃から親と一緒に図書館に行くという経験は、大人になっても図書館に行くきっかけになると思います。また、私が読書バリアフリー担当をしているので、読書バリアフリー体験会は、読書バリアフリーについて知ってもらえるきっかけに作りになるのでいいなと思いました。

子ども読書リーダー養成講座、ネットワークづくり交流会、読書バリアフリー体験会など、いろいろな部署と連携した取り組みが、着実に読書活動のプラスになっていてすごいと思った。

子ども読書リーダーの養成は、自館でも類似の取り組みをしていますが、各会場で内容が少しずつ違ったり、ボランティアさんや大学生の力を借りておられ、とても参考になる内容だと思いました。

地域、家庭、園・学校のつながりをもたせた実践例でとても勉強になりました。こうできればいいなあ、と思っているだけで、なかなか実践することができない現状ですが、実践している地域もあるということを知り、実現に向けて努力しなければ、という気持ちになりました。

行政の立場から、子どもたちの読書環境をいかに計画として支え、推進していくかという視点を学ぶことができた。計画という枠組みだけでなく、実際に現場で働く司書や関係者が顔を合わせ、悩みや事例を共有できる交流会という具体的な場があることは、横の繋がりを深め、地域の読書環境を底上げする上で欠かせないものだと感じた。

色んな団体や業種の垣根を超えて、子どもの読書活動に関わる人たちを結ぶファシリテーターの役割を県の職員が担っていることが、とても大きなことだと思いました。それぞれが個別に関わるだけでなく、それを繋ぐ人がいて情報を交換出来ることや、同じ目標を持つことが子どもの読書体験をより豊かなものにしていて感じました。この活動で、子どもの知識や心がより豊かになり人生が充実することが、未来の世界を良くしていくと思います。子どもの読書への興味や意欲、楽しみ方が増え、読書冊数など目に見える成果も少しずつ現れてきていると感じました。これからも、ぜひ続けていっていただきたいです。今後どうなっていくかも楽しみです。

子ども読書リーダー養成講座の中身がとても充実していて驚きました。読書リーダーがまたほかの子に本などおすすめて、その子が新たに読書リーダーになってくれたらだんだん読書の輪が広がって素敵だと思いました。

当市も第四次の子ども読書活動推進計画が策定されました。策定に参加し、子どもの読書について深く考える貴重な機会を得られました。策定にあたっては長崎県の子ども読書活動推進計画を参考にさせていただきました。子どもに関わるさまざまな機関と連携し計画を進めていきたいと思いました。

所属する都道府県の計画を意識する機会が少なかったため、長崎県の計画と方策を伺うことで、意識するきっかけになりました。

長崎県では多くのYA世代向けサービスを行っていることを知った。また、子ども読書リーダー養成講座の紹介にて、ビブリオバトルができる大学生がいることに驚いた。普段、YAサービスに従事しているが近隣の大学の事情をあまり知らないことに気づききっかけとなった。YA世代にとって大学生は憧れもあるだろうし、大人だけでなく高校生ボランティアや大学生など年の近い者との交流は有意義だと思った。

長崎県の子どもの読書活動推進する取り組みは県が本気でやっているのが熱く伝わってくる内容だった。子どもの周囲にいる大人が読書の大切さを伝えるか伝えないかで、子どもの読書への興味関心が変わると読んだことがあるので、県・学校・公共図書館や読書に関係する全ての大人等が連携して行っている素晴らしい取り組みだと思った。読書推進することで、主体的に学ぶ姿勢が身につく、学力も上がることを期待しているのかな？

子ども読書リーダー養成講座の取り組みが素敵です。各公共図書館と学校を繋ぎ、図書館職員とともに本の面白さを感じてもらおう活動を行ってくださるのは図書館職員にとってとてもありがたいと思います。また、地域の方で読み聞かせをしてくださる方たちも研修会があることでたくさんの仲間がいることやスキルを学ぶことによってさらに読書啓発活動にも意欲が湧くかと思います。

11. その他 お気づきの点がございましたらお書きください（一部抜粋）

動画にすべて文字がふられており、ストレスなく動画を視聴することができました。

時間が許すか自信が無かったので申込を少し考えていましたが、受講して良かったです。特に、金原先生のお話が聴けるとは思っていませんでしたので嬉しかったです。

読書を通じて広がる可能性を子どもたちに少しでも伝えるお手伝いができるよう頑張りたいと思いました。

ヤングアダルトは、私の図書館では力を入れるところが一番弱いコーナーでした。今回の研修で、ヤングアダルトの重要性を勉強できたので、一緒に努めるスタッフと共有し、YAコーナーを利用してもらえて、成長に応じて知りたいものが探せる・見つける場所として変化させていと思いました。

YouTubeでの視聴は途中の広告がとても気になってしまった。

発表者の熱意が伝わってきた。全ての世代の人に図書館が活用されるよう取組の大切さを確認した。

視聴期間が長いので、自分が好きな時間に視聴することができてよかったです。また、資料も事前に添付していただいたので資料を参照しながら視聴もできて、事例発表等を深い学びにつなげることができました。

動画と資料がとても見やすく良かったです。特に動画に字幕を付けていただいたことは、ありがたかったです。

今後も今回のように、動画視聴ができるような研修会があれば、大変助かります。

令和7(2025)年度
全国公共図書館研究集会(児童・青少年部門) 報告書

令和8年3月発行

編集・発行 令和7年度全国公共図書館研究集会(児童・青少年部門)

実行委員会

〒856-0831 長崎県大村市東本町481番地(長崎県立長崎図書館内)